

# 少年の目で見た戦争

毎年「終戦記念日のつどい」企画

太平洋戦争末期の硫黄島出撃について、海軍の人事は厳正であったと述べている本があるが、事実と違うのでは……。少年のころ、身近にあった海軍砲術学校で聞き出した出陣学徒関係の実態から、市民の目線で真相を知りたいという男性がいる。自身は旧制中学3年生で終戦を迎え、出征したわけではないが、自分で聞き出した事実を伝えなければならぬとして、ここ数年は8月15日に小さな「つどい」の場を設けている。市井の少年の目で、あの戦争を振り返る日々だ。

(忍足利彦)

安房中へ通った。当時 術学校には、学徒出陣み、子どものころからの館山エリアは館山砲術学校、館山航空隊、洲ノ崎航空隊などが置かれ、軍都として発展した。神戸村に置かれた砲

## 館山の山口栄彦さん 史実の掘り起こしも



砲術学校兵科4期の男性の著書を読む山口さん＝館山の自宅で

「軍部・館山の歴史が、複雑な気持ちにさせる。それでも「市民として平和を祈る」

村の有力者から「えいひこ」と呼ばれていた山口さんは、その有力者の使いで、砲術学校に出入りしたこともあった。そうした環境で見聞きしたのは、硫黄島へ出陣する船に乗った水兵がたった1人だけ、直前の下船命令を受けて、玉砕の島へ行かずに済んだこと。地元有力者と海軍上層部とのつながりがほのかに見え、戦後も史実の掘り起こしなどに注力した。

昭和20年7月の白浜への艦砲射撃で、布良の自宅がぐらぐら揺れていたことは忘れられない。もし、ポツダム宣言受諾がもっと遅くなら、房総半島にも米軍が上陸し、自分の命もなかったと思う。それでも山口さんは「反戦の思い」を強く掲げられずにいる。兵役の経験がない上に、砲術学校の訓練を

房日新聞 2019.8.15付

館山市の山口栄彦さん(89)。富崎村(当時)布良に生まれた。銀行員だった父の次男で、